防災・減災の輪

かがわ自主ぼう連絡協議会
会報　第 20 号　(2008･11)
事務局川西地区自主防災会

五剣山の山容の歴史に学ぶ

四国地方防災エキスパート　　松尾　裕治

今から 301 年前の 10 月 28 日に日本史上最大といわる M8.6 の宝永地震が発生し、有名な「五剣山」の東の峯が崩れて、私たちが現在、見慣れている写真のような「四剣山」になりました。

四国霊場第八十五番札所・八栗寺の背面にそびえるこの山は、もともと五つの峯があることから「五剣山」と名付けられました。当時、「五剣山」の一峰崩落の様子を牟礼町史（「蘭窓茶話」）は、「十月四日（10 月 28 日）は甚だ暖にして単衣を着る。笠を着て綿をとり苗をかる。八つ時分（午後 2 時）に地震してその声雷の如く、地裂けて水湧き出る。砂地は裂ける事わけて甚だし。五剣山の一峰崩れて落ちたり。火光雷の如く、其の響遠方まで聞えたり。」と大震動で崩落したと伝えています。

この歴史的事実から得られる教訓は「今度、私たちが遭遇するであろう南海地震でも香川県内で大きな被害を受ける危険性がある」ことを教えてくれていることであります。天災は忘れた頃にやって来ると言われていますが、実際は私たちが住んでいる危険な大地の宿命を忘れ、災害の痛みを忘れ、自分たちに適した備えを怠るから災害を呼ぶ込むのであると思います。

宝永地震以前の五剣山の山容

（四国霊場記集より、一部加筆）

五剣山は南海地震警鐘のランドマーク

この教訓を忘れないためにも「五剣山」は、皆さんに香川県の地震動の大きさを表す南海地震警鐘のランドマークとして広く伝えたいものであります。四国に住む私たちが今度、遭遇する南海地震も南海、東南海、東海地震が同時に発生した宝永地震

M8.6規模の大地震と想定されています。その発生確率も時計の針が進むごとに高まっており、今後30年間で発生する確率50%となっています。ちなみに私たちが今後30年間で火災で罹災する確率が1.9%、交通事故に遭い負傷する確率が24%、と比べると南海地震は、いつ起こってもおかしくない高い確率であります。しかし多くの方は、地震はまだ起こらない、起こっても「自分は大丈夫」という心理を持っていて自分は被害に遭わないと思っています。自分が被害を受けたら家族や周りの人も大変になるということを考えていただき自分が死なないようにする術が最も大事であります。自分が助かることが防災の最初で、自分も含めて、複数の人が助かって、初めてご近所の人を助けることができるのです。そのために一人一人が自分の命が助かる術を知り、考え、行動することが必要です。次のような防災術を身につけることが大事です。

地震に備える。被害を減らす防災術

大地震など大災害時には絵のように普段使えるものが使えなくなります。このような大災害に備える「備災」の防災術としては「ラジオや懐中電灯などの常備」、「食糧や医療品などの持ち出し品の準備」「家具の配置や転倒防止」など具体的な備えが必要ですが、私は、普段の生活習慣で無理のない形で防災術を身につけ、行えるようにすることも大事と思います。　例えば、

●普段から車のガソリンタンクを満タンにしておく。

車にはカーラジオや暖房、冷房装置があり、電話や電気が使えない罹災時においても様々な形で利用が可能であります。ガソリンタンクがエンプティに近づく前に常に満タンにする習慣を身に付けるようにしておくことです。

●朝や夜の家族が集う食事の際などに一日の予定を話す。

また携帯電話などが使えないで家族と連絡がとれないばかりか、いる場所もわからない状態が発生します。その場合、人は不安を増大させ、家族の安否確認の不安から防災活動などに専念できなくなることが想定されます。普段の生活リズムを持っている学生や主婦は比較的行動パターンが把握しやすいですが、サラリーマンは行動が把握しにくい。朝や夜の家族が集う食事の際などに一日の予定を話す習慣を身に付けることなどで、家族の行動がある程度わかり、不安を解消することに役立つはずです。また本当に大地震が起こってしまった時に被害を減らす「減災」の防災術としては、

●まず地震が起きたら「大きな声で知らせる」、自分の安全を確保することです。

前もって地震が起こることを知らせる気象庁の緊急地震速報が届かなくても大丈夫です。実際は小さな揺れを感じてから大きな揺れがあるのが地震です。最初に小さな揺れを感じたら、**皆さんは行動をおこすこと**です。

まずは、**「地震だ！」**と大きな声で叫びながら、出口（窓やドア）を開けいつでも脱出できる安全な出口を確保する。そして安全な広い場所に逃げて自分の安全を確保し自分を守ることです。また、大声で近くの皆さんに知らせることが、地震に気づかない人や高所で作業している人を身構えさせることなどにつながり人の命を助ける自助、共助の第一歩です。

みんなが力を合わせて助け合う社会の構築

最後に、まもなくやってくるであろう南海地震を迎え撃つためには、災害の第１当事者である住民の皆さんの自助を核として共助、公助が一体となって、子供、学生、大人、老人まで総力戦で地域社会として災害に立ち向かう社会を構築することが必要であります。そのためには、自主防災組織の皆さま方が実践されている小学生から大人までの地域住民の防災意識の向上を図る取り組みが大変重要であります。

是非、その活動の中に、歴史に学ぶという「先祖帰り」の視点を組み込んでいただき、自分たちが住んでいる土地がもともとどのような土地であったかなど地盤や地形について知らべ、気づき、考えていただき住民、地域、行政が三位一体となって、防災対策を進めていただきたいと思います

地域の防災活動

・・明日の大災害に備える

「地域の防災活動・・明日の大災害に備える」と題して、関西学院大学・総合政策学部室崎教授から、かがわ自主ぼう秋季研修会に於いて、阪神・淡路大震災を教訓にして、地域の防災活動の必要性と防災力向上の課題に関してご講演をいただきました。

1995 年（平成 7 年）1 月 17 日午前 5 時 46 分、明石海峡を震源地とする直下型地震「阪神・淡路大震災」により各地で甚大な被害が発生し、数多くの教訓を教えてくれた。明日の大災害に備えるためには、出たとこ勝負でなく、耐震補強や倒壊防止などの事前の備えと、地域の安全は地域で守るという地域の備えが大切。

教訓その２は、油断大敵、用意周到、臨機応変そして自立連携が地域の防災活動に必要ということ。

油断大敵は、直下型地震やプレート型地震の周期性を理解しつつ、地震はいつ発生するか分からないという認識のもと、常日頃から、地域や家庭の中でどこに危険があるかをよく知っておかなければならない。

用意周到は、地震が発生してからあわてないように、防災資機材、備蓄食料や避難所などをしっかりと準備しておかなければならない。

臨機応変は、いつ起こるかもわからない地震災害に緊急かつ柔軟に対処できるよう、地域の資源を生かし、時間との戦いに勝つための地域防災力や家庭の防災力をたかめなければならない。

自立連携は、地域の安全は地域で守るために、家族の間や地域の間で助けあえるまちづくり、つながりづくり、ひとづくりなど仕組みをつくり、常日頃から減災の運動化に取り組まなければならない。